本能寺本『芝草句内岩橋上』訳注(三)

伊藤伸江・奥田勲

心敬には、和歌と連歌の自作をおさめた全八冊からなる集『芝草』があった。彼は、この『芝草』所収の自句、自歌にみずから注をつけ、弟子たちに適宜与えていた。『芝草句内岩橋』もそのような心敬の営為による一作品であり、現在京都の古刹本能寺に上下二冊が蔵せられている。伊藤と奥田は、この作品の重要性に鑑み、翻刻と注釈を試みることとした。

【凡例】

一、底本は本能寺蔵『芝草句内岩橋上』である。対校本は、太田武夫氏蔵文明十一年古写本(文明本)、同じく太田武夫氏蔵明応十年古写本(明応本)の二本である。しかし、現在両本の閲覧が困難な状況にあり、両本との対校は原本によってはなしえない。したがって、両本は横山重・野口英一校訂『心敬集　論集』(古典社・昭和二二)の翻刻に依ったので、不審な点はその旨を注記した。略称として文明本は「文」、明応本は「明」とする。

一、翻字本文は、本能寺本を厳密に翻刻し、原文の表記の誤りかと考えられる箇所には、校注者が〈　〉書きで「ママ」と注した。

一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記に改め、必要に応じて濁点を付し、句読点を補った。原文の表記の誤りかと考えられる箇所は改め、あて字、異体字、送り仮名は標準的な表記に直して示した。漢字表記が妥当と考えられる語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直し、難読語句には、校注者が(　)書きで振り仮名を付し、踊り字はすべて開いた。翻字本文との相違箇所については、翻字を適宜参照されたい。

一、注釈本文の各句には、便宜上、校注者による通し番号を付した。

一、訳注においては、**【校異】**、**【他出文献】**、**【語釈】**、**【現代語訳】**の項目を設け、必要な場合には**【考察】**、**【補説】**等の項目も設けた。

一、**【他出文献】**にあげた心敬の作品集とその略称は以下の通りである。

心玉集(野坂氏本)→心玉集(野)　心玉集(静嘉堂文庫本)→心玉集(静)
心玉集拾遺(静嘉堂文庫本)→心玉集拾遺(静)
芝草内連歌合(天理本)→芝草内連歌合(天)
芝草内連歌合(松平文庫本)→芝草内連歌合(松)
於関東発句付句(吉田文庫本)

その他の他出文献に関しては、名称等は以下の通りである。

『宗砌等日発句(大東急記念文庫本)』は、『宗砌等日発句』、『年中日発句(金子本)』は、『専順等日発句(金子本)』、『玉連集』は『専順等日発句(伊地知本)』を、『梵灯日発句(吉川本)』は、『梵灯庵日発句(吉川本)』の名称及び句番号を『連歌大観』に従い用いる。

また、『芝草句内発句』のうち、「吾妻下向発句草」におさめられた句は(吾妻下向発句草)と記した。

一、**【語釈】**にあげた和歌、連歌、歌論、連歌論などの引用は、後述引用文献に依る。読解に有効と考えられる場合には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。引用にあたっては私に濁点を付し、片仮名など読解に不便な文字は必要に応じ平仮名、漢字等に改めた。また、源氏物語の引用は基本的には大島本により、必要な際に河内本、別本を示した。

【翻刻】

橋かすむ河へにあをき柳かな
　景曲の躰とてたゝちにみるすかたのえん
　なるをいへるなりみるほかに句のこゝろを
　たつね給ふへからす

【校異】

河へに―川へに(文)、河原に(明)　柳かな―やなきかな(文)、柳哉(明)　みるすかたの―見る姿の(文)、みる姿の(明)　いへるなり―いへる也(文)、いへり(明)　みるほかに―見る外に(文・明)　句のこゝろをたつね給ふへからす―尋ぬへからす(文)、句の心あるへからす(明)

【本文】

24、橋かすむ河辺に青き柳かな
　景曲の体とて、直ちに見る姿の艶なるを言へるなり。見るほかに句の心をたづね給ふべからず。

【語釈】○橋かすむ…橋が霞んで見える。和歌では「橋辺霞」「橋霞」などの歌題での詠は多い。「ゆく人をおもひぞわたる東路や霞かかれる佐野の船橋」(道助法親王家五十首・橋辺霞・51・藤原家隆)。「にほの海やかすみてくるる春の日に渡るも遠しせたの長橋」(為家集・橋霞・39)。「山桜散りぬるのちは人も来で／ひとりの峰に霞むかけはし」(心玉集(静)・987)。『雨夜の記』には、「景気に景気を付けたる句」として、「露しろき野の春雨のあと／橋霞む山本とをく夜は明て」との句が引用されている。**○河辺に青き柳**…河辺に生え青く見えている柳。「見渡せば佐保の河原にくりかけて風によらるる青柳の糸」(新拾遺集・柳随風・1918・西行)。柳は川べりにしだれる葉先が多く詠まれ、橋や霞と詠まれることは少ない。「橋姫のみだす柳の花かづらまゆさへかすむ宇治の川風」(草根集・水郷柳・8846・康正元年三月廿六日詠)。**○景曲の体**…景色が眼前に浮かぶかのようにありのままに詠む風体。第43句「雨青し五月の雲のむら柏」の自注に「なが雨のやや晴のぼるころの風情也。雲のむらがれるといへるばかり也。これも景曲の体とて今見るごとくの風体にゆづりはべるばかり也」とある。また、付合「太山の庵にころもうつ音／杉の葉にかゝれる月のかすかにて」についても「此句さらにふしも侍らず。たゞあかつき月はかすかに杉の葉分にのこりて、そことなき砧のこゑのみ、ねぬいほりをあらはし侍る。景曲ばかり也。」と述べており、心敬が、眼前の光景をそのままに詠んだかのような句を「景曲の体」としていたことがわかる。**○直ちに**…じかに。そのままに。**○艶なり**…上品に美しいこと。

【他出文献】芝草句内発句（吾妻下向発句草）493

【補説】「吾妻下向発句草」の配列から東国下向三年目の応仁三年春の句。岡見正雄氏は、心敬の青の色彩感覚があふれた句としてこの句をあげ、「直に見る姿の艶なるものを景曲の躰といふ詞に於て現はしている」と述べる。（「心敬覚書―青と景曲と見ぬ俤―」）

【現代語訳】

橋が霞んでみえる河辺には、青々とした柳があることよ。

景曲の体といって、そのまま見る様子が上品で美しいのを、言うのである。見えていること以外に句意を求めてはいけないのである。

【翻刻】

花おつるゆふへは秋の山ちかな

花の落はてゝ人も影たえたる山の引かへ

心すごく侍るはさなから秋ふかき比かと

こゝろほそきをいへり

【校異】

おつる―落る（明）　ゆふへ―夕（文・明）　山ち―山路（文・明）　花の落はてゝ―花落はてゝ（文）、花の落果て（明）　人も影たえたる―人も影せぬ（文）、人の影も絶たる（明）　山の―山路の（明）　引かへ―ひきかへ（文）、ひきかへて（明）　侍るは―侍は（文）、侍（明）　比か―比（文）　こゝろほそきをいへり―こゝろほそきをいふ也（文）、心細きをいへり、比等の句、心にて見給へくや（明）

【本文】

25、花落つる夕べは秋の山路かな

花の落ちはてて、人も影たえたる山の、ひきかへ心すごく侍るは、さながら秋深き頃かと心細きを言へり。

【語釈】○**花落つる夕べ**…桜の花が散る夕暮れ時。落花は暮春を表し、暮春の夕暮れ時の情景となる。「暮春の心ナラバ、…根にかへる花落花」（連珠合璧集）。和歌で夕暮れ時に落ちる様子が詠まれるのは、桐の葉であることが多い。「むらさめに桐の葉おつる庭の面の夕べの秋をとふ人もがな」（風雅集・秋上・題しらず・367・伏見院）。→【補説】○**秋の山路**…秋の山路の、その様。山路はもとより寂しいものであるが、秋には特に寂しい。「かへるさの袖まで月はしたひきぬ人は送らぬ秋の山路」（続千載集・月送客と云ふ事を・1753・前僧正道性）。「しめぢがはらにかへるくさかり／竹がりの秋の山路にけふくれて」（菟玖波集・434・救済法師）。○**人も影たえたる**…人影も絶えた。桜が散った後に訪れる人もいなくなる寂しさが詠まれる。この句は心敬によれば山里の情景であり、人影もない寂しさも際立つ。同様の心情を詠んだ句として、第18句「花落ちて小笹露けき山路かな」があり、「花の残るまでは山路に人のたえ侍らねば、さしも露のしげき笹葉にも消え失せ侍りしに、花おちはてぬれば、人の影もたえ、もとのごとく露のみ繁しとなり。」との自注が付されている。落花の後の寂しさは、和歌では歌題「花落客稀」に表現されている。「ふるさとは花こそいとどしのばるれ散りぬる後はとふ人もなし」（千載集・

春下・花落客稀といへる心をよめる・102・藤原基俊)。「花散ればとふ人まれになりはてていとひし風の音のみぞする」(新古今集・春下・花落客稀といふ事を・125・刑部卿範兼)。ここは、秋の静寂、孤独感へとつないだ発想が新しいが、発句一句の中に納められると素材の多さが目につく。心敬の付句では、時の流れを感じさせつつも寂しさを共通項に春秋をつないだ「人も散る昨日の花の山里に／木の葉音する秋ぞ悲しき」(芝草句内岩橋188／189、竹林抄552)がある。**○引きかへ…**すっかり様変わりして。**○心すごく…**非常に寂しい。気味悪いほどの寂しさで、心細さを感じるような気持ち。「古畑のそはの立木にゐる鳩の友呼ぶ声のすごき夕暮」(新古今集・雑中・1676・西行法師)。「すごきかなやくすみがまにたつ煙心ぼそさを空に見せつつ」(拾玉集・賦百字百首・冬・1266)。「思ひやれとふ人もなき山里の懸樋の水の心細さを」(後拾遺集・雑三・1040・上東門院中将)。

【他出文献】心玉集(野)108、心玉集拾遺(静)1666、芝草句内発句(吾妻下向発句草)500、

【補説】「吾妻下向発句草」の配列から応仁三年春の句。

心敬僧都十体和歌に「静対花」と題された和歌「桐のはの砌にもろき秋はあれどゆふべの苔に花おつるとき」(心敬僧都十体和歌・強力体・302)がある。上の句は「秋露梧桐葉落時」(長恨歌)により、桐の葉が砌に散った光景を、苔に散り敷いた花に比した。「春の花秋の木の葉の落つるにもはかなき世をぞ思ひ知りける」(唯心房集・縁覚・18)のように、飛花落葉に仏教思想を感ずる歌が既にあり、同様の心情が底流していよう。同時に、春秋それぞれの季節に見られる、しみいるような寂しさが心敬に意識され、対比されて詠まれていることにも気づかされる。

【現代語訳】

花が散る夕暮れは、秋の山路のように寂しく心細い気持ちがすることだ。

花が落ち尽くして、人影も絶えた山が、一転して、恐ろしいほどの寂しさを示しますのは、まるで秋が深まった頃かと思われる、その心細さを詠んでいるのです。

【翻刻】

人のもる花はこゝろのかさしかな
　あるしの花なとは一枝ののそみもむなしく
　侍れはたゝ心のうちにかさして帰るはかり也

【校異】もる―守(明)　こゝろ―心(明)　のそみ―望(文・明)　たゝ心のうちに―たゝ心うすく(文)、只心のうちに(明)　かさして帰るはかり也―かさしてかへる計也(文)、折かさし帰るはかり也と(明)

【本文】

26、人のもる花は心のかざしかな
　あるじの花などは、一枝ののぞみもむなしく侍れば、ただ心のうちにかざして帰るばかりなり。

【語釈】○人のもる…自分以外の人が管理し、守っている。「守人のとがめやせんと花をりて／わらびを手にはにぎりてぞ持」(長禄三年千句第八百韻・91／92・芳阿／恵秀)。

○**心のかざし**…心の中で、髪にかざること。かざしとは、髪や冠に草木の花や葉を飾ること。「深山路はさながら花の陰なれどあかぬ心にかざしてぞゆく」(草庵集・花挿頭・169)。「花はただ心の老いのかざしかな」(竹林抄・1613・心敬)。「花ぞなきかざして春や帰るらむ」(竹林抄・暮春の心を・1662・心敬)。○**かざして帰る**…花見に行き、その美しさを分かち持ち、名残を惜しむという気持ちから、挿頭にして帰ることは風雅な振る舞いであった。「あふ人のかざしてかへる花を見て散らずと急ぐ春の山道」(花十首寄書・114・散位基任)。

【他出文献】
心玉集(野)39(「かざしかな」は「ふたきかな」となっている)・芝草句内発句80・芝草内連歌合(天)2563・芝草内連歌合(松)28・苔莚2129

【現代語訳】
人が見守り気を配っている花は、どんなに美しくとも折り取るわけにもいかないので、心の内で髪飾りとするのです。
主人がいる桜の木の花などは、一枝折り取りたいという望みもむなしくかなえられないことですので、ただ心の中で花を挿頭にして帰ることです。

【翻刻】
うすくこき花は心の二木かな
一もとの花にみる人のなさけの浅深さま〳〵
かはり侍るへきことを

【校異】
うすくこき―薄くこき(文)、うすくこく(明)　心―こゝろ(文)　かな―哉(明)
花にみる―花を見る(文)　なさけの―なさけ(文)、情の(明)　浅深―ふかくあさきやうに(文)　浅深の(明)　さま〳〵―かはり侍る―かはり侍(文)、さま〳〵―にかはり侍(明)　こと―事(文・明)

【本文】
27、薄く濃き花は心の二木かな
一もとの花に見る人のなさけの浅深さまざま変はり侍るべきことを

【語釈】○**薄く濃き**…薄かったり濃かったりして。「うすくこき」は新古今集の宮内卿の歌が有名であり、和歌では草や紅葉の濃淡を詠むことが多い。連歌においてもやや素材は広がるもののほぼ同様で、花に用いるのは珍しい。「うすくこき野辺の緑の若草に跡までみゆる雪のむら消」(新古今集・春上・76・宮内卿)。「ゆふべの色はわかれざりけり／うすくこき花をいづれと誰おらん」(壁草・春・151／152)。○**二木**…二本の木。根元から二本に分かれた武隈の松が名高く、和歌では松の木を詠むことが多い。「武隈の松は二木をみやこ人いかがとはばみきとこたへむ」(後拾遺集・雑四・1041・橘季通)。

【他出文献】心玉集(静)676、芝草句内発句82

【現代語訳】
一本の木に咲いた花であっても、その花の色は薄かったり、濃かったりする。花を見る

人が花を思う気持ちも、深かったり浅かったり、まるで、二本の木に対するようだ。
一本の木の花を見ても、愛でる人の思いが、浅いものであったり、深いものであったりと、さまざま変わることを(詠みました句)。

【翻刻】
世には人花には梅のにほひかな
この世にいかはかりの有情侍れとも中にも
なさけふかきは人第一也又万木に花も匂も
侍れとも梅にこゆるはあるへからすと對し
侍りいさゝかあるしなとを賀し侍る会なれる

【校異】
かな―哉(明)　この世に―此世に(文)、此世には(明)　いかはかりの有情侍れとも―いか計の有情侍とも(文・明)　は人―人の(文)、人(明)　万木に―万木の(明)　侍れとも―なし(文)　あるへからすと―有へからすと(文)、なしと(明)　あるしなとを―主なとを(文)、あるしを(明)　賀し侍る会なれる―かみし侍會なれは(文)、賀し侍るはかり會なれは也(明)

【本文】
28、世には人花には梅の匂ひかな
この世にいかばかりの有情(うじゃう)侍れども、中にもなさけ深きは人、第一なり。また、万木に花も匂ひも侍れども、梅に越ゆるはあるべからずと対し侍り。いささかあるじなど賀し侍る会なれる。

【語釈】○世には人…この世の中においては、最も情趣深いのは人であるということ。さらにこの場合には、この世の中で、誰よりめでたくすばらしいのは、亭主であるこの家の主人だと祝した意味を持つ。○花には梅のにほひ…花々の中では、梅の香りこそが最もすばらしい。心敬は梅の香りの艶なる風情を次のように歌に詠んでいる。「深き夜の梅の匂ひに夢さめてこす巻きあへぬ軒の春風」(心敬集・軒梅・301)。○有情(うじゃう)…感情を持つものの意。生きとし生けるもの。○あるじなどを賀し侍る会…主人などを祝います会。連歌の張行をした人物に祝い事があり、それを祝し、発句に祝意を込めている。

【他出文献】心玉集(野)128・心玉集拾遺(静)1686・芝草句内発句(吾妻下向発句草)602

【補説】「吾妻下向発句草」の配列から文明三年春の句。

【現代語訳】
世の中では人が、花の中では梅の香りこそが、最も情趣あふれるものであるよ。(この連歌を行われたあなたは、花の中でもすばらしい梅の花のように、誰にもましてご盛運であることよ。)
この世の中に、人や動物などどれほど感情のあるものがおりましても、その中でも

情趣の深いことは人が一番なのである。また、すべての木々には、花も匂いもございますけれども、梅にまさるものはあるはずがないということで、人と梅とを対比しました。亭主のことなどを少しお祝いしました会なので(このように詠みました)。

【翻刻】
へたてゝもわれそむら山あさかすみ
　霞の山をへたてにて侍れともをのれかす
　かたむら山をのこし侍れはへたてたる山を
　かくしえすと也

【校異】
われそむら山ー我そむら山(文)、我や村山(明)　あさかすみー朝霞(明)　霞の山をへたてにてー霞の山をは隔侍れとも(文)、霞山をは隔侍とも(明)　をのれかすかたーおのれか姿(文)、をのか姿(明)　むら山をのこし侍れはー村山を残し侍れは(文)、むら山と見え侍れは(明)　へたてたる山をかくしえすと也ー山をはかくしえすと也(明)

【本文】
29、隔ててもわれぞむら山朝霞
　霞の、山を隔てにて侍れども、をのれが姿群山を残し侍れば、隔てたる山を隠しえずとなり。

【語釈】○隔ててもー朝霞が隔てているとしても。霞がかかるとその向こうの山が見えなくなることから、霞が山々を隔てている情景が歌には詠まれている。「朝かすみ色こきかたをしるべにて隔てて山も見えぬ春かな」(心敬僧都十体和歌・有心体・山霞・2)。○むら山…群山。多くのより集まっている山々。万葉集の「大和には群山あれど」の歌(巻一・2・舒明天皇)以来、歌語としての位置を占めている。「朝ぼらけしくや霞に残るなり大和島ねの春のむら山」(草根集・山霞・5442・宝徳元年二月四日条)。「むら山もひとへになびく霞かな」(大発句帳・668・紹巴)。○朝霞…朝に立つ霞。

【他出文献】芝草句内発句(吾妻下向発句草)600

【補説】「吾妻下向発句草」の配列から文明三年春の句。

【現代語訳】
朝霞が群山を隔ててはいても、その霞の姿こそが、隠しおおせぬ群山の姿なのだ。朝霞よ。
　霞が、山を隔てはしておりますけれども、自らの姿を多くの山に残していますので、隔てている山を完全に隠すことはできないということである。

【翻刻】
さほひめのわかれ(別)のくしやあさ月夜
　大極殿にてなけ侍しより別のくしといひなら
　はし侍り朝の月はくしに似たれはさほ姫の

わかれのくしか末の春の月はといへり

【校異】

さほひめのーさほ姫の(文)、佐保姫の(明)　わかれのくしー別のくし(文)、別の櫛(明)　あさ月夜ー朝月夜(明)　大極殿にてー彼大極殿にて(明)　別のくしとー別の櫛と(文)　朝の月はくしにー朝月はくしに(文)、朝の月は櫛に(明)　さほ姫のわかれのくしか末の春の月はといへりー棹姫の別のくしか末の春の月はといへり(文)、するの春の月はさほ姫のわかれのくしかと也(明)

【本文】

30、佐保姫の別れの櫛や朝月夜

大極殿にて投げ侍りしより、別れの櫛と言ひならはし侍り。朝の月は櫛に似たれば、佐保姫の別れの櫛か、末の春の月はと言へり。

【語釈】○**佐保姫**…春の女神。「棹姫は春也」(連歌新式)。「別れ」とあるので、春の別れすなわち晩春の気分がこめられているであろう。「佐保姫」に春の「別れ」を詠む歌は少なく、さらに「わかれの櫛」を使い「櫛」に結びつける発想は心敬独自のものであり珍しい。「さほ姫の春のわかれの涙とや露さへかかる岸の藤なみ」(後鳥羽院御集・暮春・1754)。「いかにしてひきもとどめんさほひめの霞のそでの春のわかれを」(慕風愚吟集・玉津島社毎月法楽に・暮春・412)。○**別れの櫛**…斎宮伊勢下向の際の御櫛の儀。帝が斎宮に黄楊の櫛をさす。『源氏物語』賢木巻には、六条御息所につきそわれた娘斎宮が、伊勢出立に際して帝との別れの櫛の儀にのぞむ様が、「(斎宮)いとゆゆしきまでに見えたまふを、帝御心動きて、別れの櫛奉りたまふほど、いとあはれにて、しほたれさせたまひぬ」と描かれている。後の澪標の巻には、朱雀院が儀式の際の斎宮の美しさを忘れかねていた様子が「かの下りたまひし大極殿のいつかしかりし儀式に、ゆゆしきまでに見えたまひし御容貌を、忘れがたう思しおきければ」とあった。このエピソードを「別れの櫛」として和歌に詠み、連歌においても賢木の巻の源氏詞として踏襲する。「櫛トアラバ、…別野宮」(連珠合璧集)。「賢木…別のくし」(光源氏一部連歌寄合)。「かへりみぬわかれの櫛のさしながらならひぞつらきたゆる黒髪」(草根集・寄櫛恋・1912・永享五年三月三日詠、永享五年詠草151)。「ささぬ戸ぼそに残る月影／野宮は別のくしも昔にて」(連歌愚句・442／443)。「野の宮のわかれの小櫛かたみかや／伊勢路にかよふ程の遠さよ」(看聞日記紙背賦山何連歌(応永三二年閏六月二五日)・81／82・前宰相／長資朝臣)。○**朝月夜**…明け方に空に残っている月。夜中に昇り、明け方に空に見えている月は、新月になる前の下弦の月である。「あさ月夜、月也。あさ月夜と云事なしともいへり」(私用抄)。なお、文明三年に太田道真の求めに応じて執筆したとの本奥書のある大阪天満宮文庫本は「月也」の部分、「あしたの月」で、より情景がはっきりする。櫛の形と類似するのは、春の終わり頃ではあるがまだ新月までになっていない月の形であり、晩春の句であることが句と自注からわかる。

なお、心敬には、「朝月夜」を詠みこんだ発句が多くみられるが、管見に入ったもので櫛との類似を詠むのはこの句だけである。本句は応仁三年春の句であるが、同じ頃関東で詠まれたと思われる句に、同年(文明元年)夏の「世にすゞしひがしにたかき朝月夜」

がある。→第36句【考察】参照

【他出文献】芝草句内発句（吾妻下向発句草）503

【補説】「吾妻下向発句草」の配列から応仁三年春の句。

【考察】源氏物語賢木巻の本文では、「別れの櫛奉りたまふ」とあり、伝本によっては「櫛」が「御櫛」となるものがある程度で、諸本に目立った相違はない（源氏物語大成による）。しかし、心敬の自注においては、「別れの櫛」は「大極殿にて投げ侍りし」と記される。この点は、「投げ櫛」に関して、『光源氏一部謌』賢木巻「わかれの櫛奉りたまふ」に対する注の最後に「わかれの櫛は口伝あり」と書かれることから、その口伝が変容を重ねる様を論じた稲賀敬二氏の論が参考になる。「わかれのくしたてまつり給ほといみしうあはれにて斎宮群行時くしをなけてたてまつり給事ある歟」（『紫明抄』）、「一、野宮の投げ櫛の最初は、瀬田の橋なり。ここにて源氏と野宮と三十三枚投げられけり。」「一、さし櫛とは三十三枚投げて、今一枚を親のかたより投げらるるを、野宮一枚取らせ給ひて、二に割りて、両の鬢髪にさす。これをさし櫛の大事といふ。」（以上『蓬左文庫本源氏物語抜書』）、「長月十八日、伊勢へ下給。相坂ニテ投櫛卅一枚、二枚ヲバ左右ノ髪ニ指。」（『塵荊抄』）といった記述が源氏物語の注釈書、梗概書に見られる。心敬にも、「投げる」という行為が信じられていたわけである。続群書類従本系『類字源語抄』には、「わかれのくし」を立項し、「わかれのくし（近江のせたまてくしをさし給ふイ）　斎宮下向ニアリ」とする。より後代の完成となる広本系では注で不審をのべており、このような言説の広がりが一時的であったことが予測される。→伊藤伸江「心敬発句考―『芝草句内岩橋上』の『源氏物語』関係句―」（「文学・語学」第二二二号・平成三〇・五）

【現代語訳】

佐保姫が別れを告げて去っていく、その別れの櫛なのだろうか。明け方の空に残っている月は。

あの源氏物語で、大極殿において櫛を投げましたその場面から、帝が斎宮に挿す櫛を別れの櫛と言いならわしております。朝に出ている（月の終わり頃の）月は、櫛の形に似ているので、斎宮ならぬ佐保姫との別れを思わせる、別れの櫛なのだろうか、春の終わり頃の月はと言ったのである。

【翻刻】

郭公とはすかたりのはつ音かな
　はつこゑを聞えたる時はすゝろにあへる人に
　かたりいてたく侍れは也

【校異】

郭公―ほとゝきす（文）、時鳥（明）　とはすかたり―とはす語（明）　はつ音―初音（文・明）
はつこゑ―初音（文・明）　かたりいてたく―語たく（文）、語出たくのみ（明）

【本文】

31、郭公とはずがたりの初音かな

初声を聞きえたる時は、すずろに会へる人に語り出でたく侍ればなり。

【語釈】○とはずがたり…人に尋ねられないのに、自分から話しだすこと。「よ所にふけみし世の夢は跡もなしとはずがたりのさ夜の松かぜ」（心敬集・懐旧・270）。○初音…鳥・虫などの、鳴きだす時期の最初の鳴き声。多く鶯に言うが、ここはほととぎすが初めて鳴く声。人々にとって初音は心待ちにするものだった。「けふもまたたづねくらしつほととぎすいかにきくべきはつねなるらん」（金葉集三奏本・夏・ほととぎすをたづぬといへることをよめる・111・藤原節信）。ほととぎすは初夏に山から人里に降りてきて鳴く。

【他出文献】心玉集(静)733・心玉集(野)152・芝草句内発句154・芝草内連歌合(天)2572・芝草内連歌合(松)37・宗砌等日発句120・専順等日発句(伊地知本)113

【現代語訳】

尋ねられもしないのにその声を聞けたことを語る、そんなほととぎすの初音であることよ。

ほととぎすの初音を聞くことができた時には、むやみに、会った人にそれを語り出したくございますので(このように詠んだのです)。

【翻刻】

ほとゝきすきかぬ初音や朝くもり

はつ音をまつ比のなにとなくうちくもりたる侍

空なとは今日はさりともと思をかけぬれは先

きくことくこのもしく侍ると也

【校異】

ほとゝきすー郭公(文・明)　初音や朝くもりーはつねやあさくもり(文)、初音や朝霞曇(左にみせけち記号ヒ　明)　はつ音をまつ比ーはつ音を待比(文)、初音を待比(明)　なにとなくー何となく(文・明)　うちくもりたる侍ー打曇待る(文)、打くもりたる(明)、今日はさりともとーけふはさり共と(文)、今日はさりともに(明)　かけぬれはーかけ侍れは(明)　先きくことくーまつきく如く(文)、先きくことく(明)　このもしく侍ると也ーたのもしく侍るとなり(文)、たのもしく侍ると也(明)

【本文】

32、ほととぎす聞かぬ初音や朝ぐもり

初音を待つ比の何となくうちぐもりたる空などは、今日はさりともと思ひをかけぬれば、まづ聞くごとく好もしく侍るとなり。

【語釈】○聞かぬ初音…まだ耳にしていないほととぎすの初鳴き。心玉集、芝草句内発

句は「なかぬ初音」である。「夏の始の心ナラバ、…時鳥を待初音」（連珠合璧集）。「きかぬにぞこゝろはつくす郭公」（菟玖波集・4141・前大納言為氏）。「ほとゝぎすなかぬはつねぞめづらしき」（菟玖波集・4149・一遍上人）。**○朝ぐもり**…明け方に、空が曇ること。多く春もしくは秋の朝を詠み、春では桜の花が咲く様子と重ねることが多い。正徹が非常に好み詠む語句。「むらさきの藤さくころのあさぐもりつねより花の色ぞまされる」（風雅集・春下・285・前大僧正覚円）。「さびしさは深山の秋のあさぐもり霧にしをるる槙の下露」（新古今集・秋下・492・後鳥羽院）。「うちしめるまがきの山のあさぐもり露よりよはし荻の上風」（心敬僧都十体和歌・麗体・朝荻・161）。「郭公なけや卯月の朝ぐもり」（宗砌等日発句・107）。**○今日はさりとも**…今日はそうであっても聞くことができるだろう。○まづ聞くごとく…ともかく聞いたかのように。

【他出文献】心玉集(静)785（第二句「なかぬはつ音や」）・心玉集(野)177（第二句「啼ぬ初音や」）・芝草句内発句155（第二句「なかぬはつ音や」）

【現代語訳】

待っているほととぎすの初音は、まだ耳にしてはいない。それはそれで残念だが、このような朝曇りの日は思いがけず聞くことがある。そう思って待っていることが楽しいではないか。

ほととぎすの初音を待つ頃の、なんとなく曇っている空の様子などは、今日はそれでもきっと聞くことができるだろうと希望をかけていたので、聞いていないことはさしおき、聞いたかのように好ましく思われますということである。

【翻刻】

一こゑに見ぬ山ふかしほとゝきす
閑日に一こゑなと音信侍るはさなから山家
なとの心うかひ侍れは也武蔵野にての発
句なれる

【校異】一こゑに―一聲に(明)　ほとゝきす―郭公(明)　一こゑなと音信侍る―ひと聲なとをとつれ侍る(文)、一聲なと音信侍る(明)　也―なり(文)　なれる―ナシ(文)、なれは、かやうに申侍り(明)

【本文】

33、一声に見ぬ山深しほととぎす
閑日に一声などおとづれ侍るは、さながら山家などの心浮かび侍ればなり。武蔵野にての発句なれる。

【語釈】○見ぬ山深し…周囲に山は見えないが、深い山の中にいるかのように思われることだ。**○閑日**…何も用のない、ゆったりした日。定家と慈円の文集百首歌題に、『白氏文集』巻二九「旧思」から、「閑日一思旧　旧遊如目前」が見られる。**○武蔵野**…武蔵国の歌枕。武蔵国に広がる野をいう。武蔵野は、見渡す限りの野原として詠まれる。「行く末は空もひとつの武蔵野に草の原より出づる月影」（新古今集・秋上・藤原良経・422）。「むさしのはつきのいるべきみねもなしをばながするゑにかかるしらくも」（続古今集・秋

上・大納言通方・425）。木戸正吉『和歌会席作法』には、「武蔵野にての会」が見え、孝範はじめ心敬や都人も参加していた旨の記述がある。自注の「武蔵野にて」も、このような歌会同様に、連歌を行った会席の場を述べているととるべきであろうか。（安井重雄「木戸正吉『和歌会席作法』翻刻と校異」（「龍谷大学論集」NO. 457・平成一三・一）参照）。

【他出文献】竹林抄1674・新撰菟玖波集3706・心玉集拾遺（静）1715・芝草句内発句（吾妻下向発句草）505・大発句帳2797（初句「ひとこゑは」）

【補説】「吾妻下向発句草」の配列から応仁三年（五月二十八日に文明に改元）夏の句。竹林抄の古注釈では、この句について、次のように、「見ぬ山」に込められた意味を深山にいるかのように心で感じとることと解説している。「思もかけす一こゑきくきはには、只深山の心地せる義也」（竹林抄之注）。「武蔵ニテノ発句也、山ノある処ニテハ、無曲、心ノ深ミトシタル也」（竹聞）。

【現代語訳】

ただ一声鳴いたその声に、周囲に山など見えないのだが、まるで深山の中にいるかのような心地がしたことだ、ほととぎすよ。

ゆったり暇な日に、ほととぎすが一声鳴いたりなどいたしますのは、まるでそのまま山家にいるかのような気持ちになります。武蔵野で詠んだ発句なので、このように詠みました。

【翻刻】

夏ふかみ風きくほとのわか葉かな

春のほとのやはらかなる葉にはいかはかりの

風もをときこえす侍るに漸夏たけ葉も

のひ侍るかかすかに風の音し侍るはと也

【校異】

ふかみ―深み（明）　きく―聞（明）　わか葉かな―若葉かな（文）、若葉哉（明）　春のほとの―春のほと（文）　葉には―葉に（明）　はかり―計（文・明）　風もをと―風も音（文・明）　きこえす侍る―聞えす侍（文）　のひ侍るか―のひ侍る（文）　侍るは―侍れは（文）

【本文】

34、夏ふかみ風聞くほどの若葉かな

春のほどのやはらかなる葉には、いかばかりの風も音聞こえず侍るに、漸く夏たけ、葉も伸び侍るか、かすかに風の音し侍るは、となり。

【語釈】○**夏ふかみ**…夏が深まって。第36句にも詠まれる。心敬は、この語句から、夏の木々や草の若葉の成長ぶりを連想する。「木葉がくれをたのむおく山／夏ふかみあるかなきかの夜半の月」（吾妻辺云捨・夏・157／158）。○**風聞く**…風の音を聞く。若葉の葉ずれの音から、風が吹いたことを知ること。「朝露のおきそふ色やふかみくさ／はれて風きく松の五月雨」（染田天神法楽千句第二百韻・発句／脇）。○**若葉かな**…「若葉」は春から夏にかけて美しさを見せ、みずみずしい生命力を持つ。それゆえに、季の表現に関与する際には、どちらの季節にも使われ、それぞれの季節を強く印象づける言葉となる

場合がある。心敬は、若葉のイメージを、句中でその時々に季を変えて自在に使用していると思われ、そうした詠み方は、宗祇にも影響を与えている。「青葉」を使用する際にも同様である。→第55句【語釈】。「花ちれば秋の風まつ若葉かな」（萱草・春・63、宇良葉・春・142）。「かへれ春いまを色なる若葉かな」（再昌・大永七年・四月二日、神宮法楽山科にて連歌すとて、正盛申請し・5242）。「秋やこし夏くれなゐの若葉かな」（再昌・天文三年・百句発句とて、周桂法師所望（四月：稿者注）八日・1427）。

【他出文献】心玉集(静)784、心玉集(野)176（初句「夏ふかき」）、芝草句内発句161、芝草内連歌合(天)2574　芝草内連歌合(松)39

【現代語訳】

夏が深まって、風の音が聞こえるくらいの若葉となったことよ。

春のうちの柔らかな葉では、（葉が薄く柔らかなので）どんな風に吹かれても葉音が聞こえませんが、次第に夏も盛りの頃になり、葉も伸びたのでしょうか、かすかに風の音がしますよ、ということである。

【翻刻】

夏草をむすひてかへる春もかな
　草を結ふといへる事は野なとの道のしるし
　なれは草を結ひても春の跡に立かへれかし
　となり

【校異】

むすひて―結ひて(明)　かへる―帰る(明)　結ふといへる事―結ふと云事(文)、むすひてといへる事(明)　なれは―也(明)　草を結ひても―あはれ草をむすひても(文)、万葉なとに見え侍りされはあはれ夏草結ひてしるへにも(明)　春の跡に―春のあとに(文)、春の跡へ(明)　立かへれかし―帰れかしと也(文)、立かへれかしと也(明)

【本文】

35、夏草をむすびてかへる春もがな
草を結ぶといへる事は、野などの道のしるしなれば、草を結びても春の跡に立かへれかしとなり。

【語釈】○**夏草**…夏に茂る草。丈高く、旺盛な生命力を見せる。十三代集において、非常に多く見られる語であるが、玉葉・風雅にはほとんどない。「夏草は茂りにけりなたまぼこの道行き人も結ぶばかりに」（新古今集・夏・188・藤原元真）。「むすぶべき道行き人も迷ふまでさながらしげる野辺の夏草」（政範集・径夏草・343）。「外面なる籬や野べを隔らん／春はきのふに茂る夏草」（熊野千句第四百韻・9／10・盛長／宗怡）。○**むすびて**…草を結び道しるべとする。「夏草トアラバ、…むすぶばかり」（連珠合璧集）。「夏草は結ぶばかりになりにけり野飼し駒やあくがれぬらむ」（後拾遺集・夏・168・源重之）。「おろかに我ぞまよひはてぬる／むすびおく道の夏草身もわかで」（下草(龍谷大学本)・夏・199／200）。○**かへる**…「かへる」は「帰る」と「還る」を掛けた。「老の浪氷を出づる春もがな」（竹林抄・発句・1529・心敬）。○春もがな…春であってほしいなあ。季節

が移ってしまうことを前提にして、それでも春に立ち戻ってもらいたいという気持ち。心敬にはこの表現がいくつか見られる。「をだまきにするくりかくる春もがな」（芝草句内発句 123）。

【他出文献】芝草句内発句 169

【補説】夏の発句に、春になってほしいという言葉は珍しい。和歌でも、夏から春にかえるという視点は、季節に逆行しているせいか非常に少なく、「夏草も深くぞ春にかへりける五月雨越ゆる真野の夕暮」（拾玉集・五月雨・4491）がある程度である。

複数の季節を思わせる言葉を入れる句の作りに関しては、春・夏・秋と三つの季節にわたる句に関して、心敬は、「夏草や春の面影秋の花」という句を例にあげ、姿のいりほがの句として非難している（『ささめごと』）。ただ、ここからは「夏草」に着目した場合、夏の季のみならず、春・秋に思いを馳せる形の発句表現が模索されていたこともわかる。夏の句に春の事物を添え願う句としては、「夏草に消にし春の雪もがな」（宗砌等日発句・174）があった。

春を希求する表現については、『竹林抄』1559 の心敬の発句「老の浪氷を出づる春もがな」には、「世の騒がしき比、思ふ事や侍けん」との詞書があり、『竹聞』は「応仁ノ乱ニ細川殿にてノ会也、春クレハ氷る浪も出頭スレトモト也、蟄居ノ心也」と注している。35 句は、関東下向以前の句（成立年次は不明）であるが、この句にも、言外の意味があったかもしれない。

【現代語訳】

夏草を結んで道しるべとして帰るように、春が還って来てくれたらいいのに。

草を結ぶということは、野などの道での道しるべであるので、草を結んでそれを頼りに春が立ち戻れよということである。

【翻刻】

夏ふかみ風もなこやかした葉哉

夏の下葉は若葉なれは風もなこやかなると
いへりなこやか下とつねにいひならはし侍れは
こと葉にひかれて下葉といへり
あつふすまなこやかしたにふせれとも
君とし寝ゝはは旅しさむしも
なこやかにやはらかなる下にねたれ共ひとりはさむしと也

【校異】した葉哉ー下葉かな（文）、下葉哉（明）　いへりー云（文）　なこやか下－なこやかした（文）　つねにーふるく（明）　こと葉にーことはに（文）　下葉といへりー下葉といへり万葉に（文）、下葉といへり万葉の哥（明）　なこやかしたーなこやか下（文・明）はたしさむしもーはたへさむしも（文）、はたし寒しも（明）　やはらかなる下にーやはらかなりといへり（文）、やはらかなる下には（明）　ねたれ共ひとりはさむしと也ーナシ（文）、ねたれと獨は寒しと也（明）

【本文】

36、夏ふかみ風もなごやがした葉かな

夏の下葉は、若葉なれば風もなごやかなるといへり。なごやが下と常にいひならはし侍れば、言葉にひかれて下葉といへり。

あつぶすまなごやがしたにふせれども君としねねばはだしさむしも
なごやかにやはらかなる下にねたれども、ひとりはさむしとなり。

【語釈】○夏ふかみ…第34句語釈参照。○なごや…形容詞「なごし」の語幹に状態を表す接尾語「や」がついたもの。穏やか、温和であるさま。下葉は下方の枝にある葉。「われぞしくたのめし人のことの葉はなごやがしたの夜の衾を」(草根集・詞和不逢恋・4399)。「とはばただなごやが下のさよあらし／とこふりぬともおもふかたしき」(秋津洲千句第八百韻・23／24)。○あつぶすま…厚い寝具。万葉集巻第四、524番歌による表現。西本願寺本万葉集の現在の読み下しは、「蒸(む)し衾なごやが下に伏せれども妹とし寝ねば肌し寒しも」であるが、六百番歌合にはこの歌を本歌として顕昭が「厚衾和やが下は思やる心のみこそ夜を重ぬらめ」と詠んでいる。心敬も「あつぶすま」と読む。『万葉詞』、宗祇の『万葉集抄』、いずれも万葉集524番歌は「あつふすま」と記されている。

【他出文献】芝草句内発句(吾妻下向発句草)510

【現代語訳】

夏がふかまり風もなごやかに吹く、木々の下葉の様子よ。

夏の木々の下葉は、若葉なので、風も穏やかであると言っている。「なごやが下」といつも言いならわしていますので、その言葉にひかれ、下葉と言っている。

あつぶすまなごやがしたにふせれども君とし寝ねばはだしさむしも

あたたかくやわらかな寝具の中に寝ているけれども、一人は寒いということである。

【考察】

「吾妻下向発句草」510に入ることから、文明元年夏の句。応仁三年は五月二十八日に、文明と改元している。

島津忠夫氏に、この年夏に富士見物にでかけたかとの推定があり(『心敬と宗祇』p58)、また「吾妻下向発句草」のこの句の前後508～519句(特に509～518句)に関して、金子金治郎氏も、伊豆・箱根への旅に関係するものではないかとされる(『心敬の生活と作品』P140～p144)。金子氏はこの句に関し、「風もなごや」を、「和(なごや)か」と「伊豆韮山町の管内になる奈古屋」との掛詞と考えられている。「奈古屋」は、現在は静岡県伊豆の国市奈古谷。ただ、心敬の自注に地名に関しての説明はないゆえ、断定はむずかしい。

なお、伊豆・箱根の旅に関連して、金子氏は「吾妻下向発句草」内でこの句に続く511句「世にすゞしひかしにたかき朝月夜」を、堀越御所に住む足利政知を称えた祝言句であり、句作の背景に伊豆の堀越公方訪問を考えられる。その際、『雲玉和歌集』において、「「連歌士たちの、心敬の、朝月夜と云発句なされしを、夕月夜はあるべし、あさ月夜あるべからず。月は夜にかくる、あしたの月は、ひるにかゝるとて、きらはれしにや」と批判した発句が、これであろうと思う」と述べられるが、『雲玉和歌集』は、宝治百首の蓮性歌「さしながら千代もやへなん朝づくひむかふつげぐしひさにふりつつ」の異伝歌「さすからにちよもへぬべし朝月夜むかふつげぐしひさにふりつつ」に関しての挿話であり、「櫛」と「月」のイメージの結びつきを考えると、連歌師らがまず念頭においた発

句は、第30句「佐保姫の別れの櫛や朝月夜」の方であろうと考える。→伊藤伸江「心敬発句考―『芝草句内岩橋上』の『源氏物語』関係句―」（「文学・語学」第二三二号・平成三〇・五）

【翻刻】
朝すゝみ水の衣かる木かけかな
　水衣なと詩にも侍れは也氷のこと也木の下
　水のほとりにあしたたゝすみぬれはさなから
　水のきぬをきたるはかりなりと

【校異】
文明本にはこの句及び注はない。
朝すゝみ―朝涼み(明)　衣かる―きぬかる(明)　木かけかな―木陰哉(明)　水衣―水のきぬ(明)　氷のこと也―氷の事也(明)　木の下水の―されは木の下水なとの(明)　たゝすみぬれは―たゝすめは(明)　水のきぬを―氷のきぬを(明)　はかりなり―計なる(明)

【本文】
37、朝すずみ水の衣かる木かげかな
　水衣など詩にも侍ればなり。氷のことなり。木の下水のほとりに、朝たたずみぬれば、さながら水のきぬをきたるばかりなりと。

【語釈】○朝すずみ…夏の朝の涼しい頃、風に吹かれ涼むこと。「夏ふかき草のまがきの朝すずみ緑の色のきよくもあるかな」（伏見院御集・1257）。「陰やみね雪をみぎはの朝涼み」（自然斎発句・834）、「あさすずみただ山風の木陰かな」（自然斎発句・852）。○水の衣…氷の異名。「水の衣　氷の事也。水のきぬともいふ」（匠材集）。但し「水衣」は漢詩（杜甫「重題鄭氏東亭詩」など）では海藻の一種アオサをさしている。氷とする根拠は未詳。○かる…上代東国語で、「着る」または「ける」のなまり。「笹が葉のさやぐ霜夜に七重着(か)る衣に増せる児ろが肌はも」（万葉集・巻二十・防人歌・4431）。

【他出文献】心玉集(静) 767・心玉集(野) 159・芝草句内発句 196・芝草内連歌合(天) 2584・芝草内連歌合(松) 49

【現代語訳】
朝、涼しい頃に風に吹かれて涼んでいる。木陰にいると、まるで水の衣をまとっているかのように涼しく感じられるのだ。
　「水衣」などと、漢詩にもございますからこのように詠みました。氷のことである。
　木の下を流れる水のほとりに、朝、佇んでいると、まるで冷たい水の衣を着ているかのようであると(詠みました)。

【翻刻】

荷葉
はちす葉〻水よりこすの匂かな
　はちすは夏のたきもの〻名なれは池上より
　みすのうちなとえんにふかくかほるといへり

【校異】荷葉はちす葉〻ー蓮葉は(文)、荷葉は(明)　匂かなーにほひ哉(文)、匂哉(明)　はちすはー蓮は(文)、荷葉は(明)　たきものー薫(文・明)　池上よりー池の上より(文)、池上なとより(明)　みすのうちなとーみすのうちは(明)　かほるといへりーかほる也(明)

【本文】

38、荷葉はちす葉は水よりこすの匂ひかな

はちすは、夏の薫物の名なれば、池の上よりみすのうちなど艶に深く薫るといへり。

【語釈】○はちす葉…ハスの葉。また、「荷葉」の場合、ハスの葉の意味とあわせ、夏に用いる代表的な薫物の名でもある。「ただ荷葉を一種合はせたまへり。さま変り、しめやかなる香して、あはれになつかし。」(源氏物語・梅枝)。薫物として「蓮葉」を詠む発句は宗祇にみられる。「露をくたき匂ひをはすのはかぜかな」(自然斎発句・蓮・754)。「はちす葉もみきはにうつむ匂ひかな」(自然斎発句・蓮・757)。○こす…すだれ。「ねやのうちはこすのにほひにうちくもり／人やとひくる袖のおもかげ」(河越千句第三百韻・91／92・心敬／筱弘)。○艶…優美で魅力的なようす。

【他出文献】心玉集(静)769・心玉集(野)161(初句「はすのはは」)・芝草句内発句234

【現代語訳】

はちす葉とは、水の上にある葉というよりも、薫物として御簾の内にたきしめた匂いなのだなあ。

はちすというのは、夏の薫物の名であるので、池の上よりも御簾のうちなどに優美に心深く薫るものだというのである。

【翻刻】

日にかさせ青葉さくらの三重かさね
　さくらの三重かさねとはあふきのこと也夏の
　日におりかさせといへるはかり也源氏にある事也

【校異】

青葉さくらー青葉櫻(明)　さくらのー櫻の(文・明)　とはーと(明)　あふきのこと也ー扇の事也(文)、あふきの事也(明)　おりかさせー折かさせ(文・明)　はかりー計(文・明)

【本文】

39、日にかざせ青葉桜の三重がさね

さくらの三重がさねとはあふぎのことなり。夏の日に折りかざせといへるばかり

なり。源氏にあることなり。

【語釈】○日にかざせ…日の光にかざして扇の下を陰にせよ。元来、桜をかざすのは優美な大宮人の行為。「ももしきの大宮人はいとまあれや桜かざしてけふもくらしつ」（新古今集・春上・赤人・104）。『芝草句内発句』文明元年の句（514）に「青葉をもかざせ清水の元桜」という句がある。○青葉桜…春の終わり頃、木々に青葉が出てからも咲いている桜。「花は春はるははなとてよし野山あをばざくらに別をしみて」（拾玉集・2556）。「春にこそあふとおもひしあふ坂の青葉さくらに立別れぬる」（拾玉集・5085）。○三重がさね…檜扇で、板数が多く重なったものをさす。板七、八枚が一重で、それが三つ重なったものという。「三重トアラバ、帯　扇」（連珠合璧集）。ここでは「桜の三重がさね」で、『源氏物語』花宴の巻で、光源氏が朧月夜の君との一夜のあと、とりかえた扇をさす。正徹の『源氏一滴集』には項目として取り上げられていないが、正徹弟子正般の筆と伝えられる『源概抄』には記載が存する。「内侍のかみの扇はさくらの三重がさねにかすめる空の月を水にうつしたり。この心を付べし。」（『源概抄』）。和歌では正広や孝範ら正徹周辺の歌人に集中的に詠まれており、連歌では心敬あたりで連歌師に広まっていた源氏詞といえよう。「とりかへしさても桜の三重がさねいとど心やうつりはてけん」（為尹千首・寄扇恋・772）。「花もなき閨に桜の三重がさねいつしか風をならす比かな」（松下集・閑中扇風・2763）。「尋ねても又や桜の三重かさね霞める月の行へ知らねば」（孝範集・寄扇恋・111）。「霜蘆やかれ野の衣の三重重ね」（園塵第四・2339）。「三重」という語句に関連しては、「三重」と「見え」もかけるか。心敬はこの句を詠んだ翌文明三年春には「のどけしな九重八の国津かぜ」との発句を詠み、数詞を句に折り込んでいる。兼載も「三重」を句に詠むが、兼載は扇ではなく、衣を三重とする。○折りかざせ…「折りかざす」は、折って日にかざす。「よよの春秋の宮人をりかざせ雲居の庭の藤のさかりを」（秋篠月清集・治承題百首・祝・477）。「桜の三重がさね」の扇の「桜」を、枝と見て「折りかざせ」と言ったか。

【他出文献】芝草句内発句（吾妻下向発句草）564

【現代語訳】

日の光にかざせよ、青葉の季節となって、その青葉の中に残る桜ではないが、桜の三重かさねの扇を。

桜の三重重ねとは、扇のことである。夏の日におりかざせといっているだけのことである。源氏物語にあることである。

【補説】「吾妻下向発句草」の配列から、文明二年夏の発句。

このあたりから、夏の桜や雪を思わせる橘など、景物を本来の季節とずらした、機知ある表現の句を並べている。

【翻刻】

清水せく岩もとさくら風もかな

岩もと清水のなかるゝあたりの桜なれはさしも

花にいとひし風をも此比は待ぬると也

定家卿の心のほとを風にみえぬるなとの面影なるへく哉

【校異】
岩もとさくら―岩もと櫻(文)、岩本櫻(明)　風もかな―かせもなし(文)　清水の―清水(明)　待ぬると也―待と也(明)　こゝろの程を―心のほとを(明)　なとの―の(明)　面影なるへく哉―おも影なるへくや(文)、面影か(明)

【本文】
40、清水せく岩本桜風もがな
　岩本清水の流るるあたりの桜なれば、さしも花にいとひし風をも、このごろは侍りぬるとなり。定家卿の心のほどを風に見えぬるなどの面影なるべくか。

【語釈】○岩本桜…岩のほとりから生えている桜。「芳野川岩もとさくら咲きにけり峰よりつづく花の白浪」（続後拾遺集・春上・72・九条道家）。「たが世にか深山にたねを槙たてる岩もと桜さきてちるらん」（心敬僧都十体和歌・長高体・寄花雑・193）。○岩本清水…岩のほとりの清水。○侍りぬる…つい待ってしまう。○心のほどを風に見えぬる…藤原定家の和歌「夏ふかき桜がしたに水せきて心のほどを風にみえぬる」（拾遺愚草・二見浦百首・126）による表現。夏になると、桜の木の下に水をせき入れて、その涼風で涼む。春には花を散らすといって嫌っていたのに、風を望むように心変わりした、その変わりやすい心を風にみられてしまったということ。

【他出文献】心玉集(静)762・心玉集(野)200（第三句「かせもなし」）・芝草句内発句231・芝草内連歌合(天)2585・芝草内連歌合(松)50

【補説】『芝草内連歌合(天)』では、第37句との勝負で、持。夏の涼風の吹き来るイメージを競う。『芝草内連歌合(松)』では、同じ勝負で第37句の勝ちとなっている。

【現代語訳】
清水をせきとめる岩のほとりの桜には、涼しさを呼ぶ風があってほしい。
　岩のほとりに清水が流れるあたりの桜であるから、春にあれほど花に吹くことを嫌った風でも、この頃にはつい待ってしまうということです。定家卿の「心のほどを風にみえぬる」などの歌の面影が感じられるのではないか。

【翻刻】
をそさくら春はみすまく軒は哉
　春はつゐに見さりしといへる秀句也かやうに
　なまりて侍るを一の躰なれは也古哥ともにも
　玉たれのみすはいかてか山しろのとはぬつらさは
　なとのたくひ数をしらす

【校異】
をそさくら―遅櫻(明)　軒は哉―軒端かな(文)　つゐに―終に(明)　といへる秀句也―軒の花いまみすをまくといへる秀句也(文)　侍るを―いへる(明)　古哥ともにも―ナシ(文)、古哥ともに(明)　玉たれの―玉たれの(文)、玉垂の(明)　なとのたくひ―のたくひ(文)　数をしらす―数を不知(文)、数を知す此句なまれるを粉骨(明)

【本文】

41、遅桜春はみすまく軒ばかな

春はつねに見ざりしといへる秀句なり。かやうになまりて侍るを一の躰なればなり。古歌どもにも、玉だれのみすはいかでか山しろのとはぬつらさはなどのたぐひ数をしらず。

【語釈】○遅桜…開花時期に遅れて咲く桜。一斉に花が咲く時期に遅れる点で、普通の桜と違い、徒然草一三九段は、「すさまじ」と述べている。「遅桜　春也。歌ニハ夏の題に用ゐる」（産衣）。「三月渡の発句には、…遅桜は初桜よりもめづらしき体、をそ桜は初時鳥を待てやなど咲かぬ体」（梅春抄）。「夏山のあを葉まじりのおそ桜はつはなよりもめづらしきかな」（金葉集二度本・95・藤原盛房）。「おそ桜春暮れて咲く花なれば残るものからかた見ともなし」（新後拾遺集・夏歌中に・656・津守国夏）。「山つらなりて霞む谷の戸／遅桜こがくれふかく咲きみだれ」（宝徳四年千句第八百韻・宗砌／竜忠・84／85）。「川の淀みに花ぞ残れる／み吉野の夏みるまでの遅桜」（ささめごと・長高体之句・十仏）。○春はみす…春のうちは見ることもなかった。「御簾」に「見ず」を掛けている。「御簾」は基本的には夏の歌語。「垂れこめて春の行方知らぬも、猶あはれに、なさけ深し。」（徒然草一三七段）。○秀句…掛詞を使った句。○なまりて…言葉を別の意味にとらえてずらしかえて。○玉だれの…「玉だれのみすはいかでか」と詠まれた和歌は管見に入らないが、類似の古歌としては、「君によりわが身ぞつらき玉だれの見ずは恋しとおもはましやは」（後撰集・恋一・題知らず・566・詠み人知らず）など。「御簾」を「見ず」と掛ける例歌となる。○山しろの…千五百番歌合で詠まれ、後に新勅撰集に入集した和歌「津の国のみつとな言ひそ山城のとはぬつらさは身にあまるとも」（新勅撰集・恋五・1001・宮内卿）。「山城の鳥羽」の「鳥羽」を「訪はぬ」と掛けるが、判詞は「山城のとはにあひみんとよめるは、鳥羽ときこえたるに、とはぬつらさはとあるは、すこしかすかにや侍らん」と批判する。

【他出文献】芝草句内発句（吾妻下向発句草）466

【補説】「吾妻下向発句草」の配列から応仁二年夏の句。

【現代語訳】

遅桜は、春の間、見ることもなかった。夏になり、ようやく御簾を巻き上げて軒端を眺めた今、軒に咲いているのを見ることよ。

春にはとうとう桜を見なかったと、掛詞を使って述べている秀句である。このように、別の意味にとらえてずらしますのを、一つの形としているのです。古い歌にも、「玉だれのみすはいかでか」とか、「山しろのとはぬつらさは」などといった類の歌が数もわからないほど（あります）。

【翻刻】

橘にはらひしほとの雪もかな

よもきふの宿のたち花にはつもりし雪を

すいしんにはらはせ侍しそかし此比の

花の雪のうすきことを無念といへり

【校異】橘に―たち花に(文)　ほとの―程の(明)　よもきふの宿のたち花―蓬生の宿の橘(文)、よもきふの宿の橘(明)　すいしんに―すひしんに(文)、随身に(明)　はらはせ侍し―はらはせ侍しそかし(文)、はらはせしそかし(明)　ことを―事を(文)、事(明)　無念といへり―無念と也(明)

【本文】

42、橘に払ひしほどの雪もがな

蓬生の宿の橘には、つもりし雪を随身にはらはせ侍りしぞかし。このごろの花の雪の薄きことを無念といへり。

【語釈】○橘に払ひし…『源氏物語』末摘花の巻で、光源氏が末摘花と契った翌朝、末摘花邸を出る際に、深い雪に庭の橘が埋もれているのを随身に払わせた様子。「橘の木の埋もれたる。御随身召して払はせたまふ」(源氏物語・末摘花)。○雪もがな…(花びらの)雪が散り敷いてほしい。「雪」は、橘の白い花を見立てている。一句は、源氏物語の蓬生の場面をふまえつつも、橘の花咲く夏の様子である。「夏の心、…橘」(連珠合璧集)。「五月渡の発句には、…橘の雪に五月雨はみぞれなる体」(梅春抄)。○蓬生の宿…末摘花の館。「橘の枝うちはらふ庭の雪に松のみおもき蓬生の宿」(亜槐集・雪埋松・786)。○花の雪…まるで雪が降ったかのように、散り敷いた橘の花の花びらが見えるさま。「月影に花たちばなの散みれば消ぬ雪とぞ庭につもれる」(教長集・夜花橘・280)。「木の本のかげふむ月は橘のちりしきけりな匂ふ白雪」(草根集・盧橘・9801・長禄元年五月廿六日詠)。「君がため花橘を雪とみてすだれをあぐる雲の上人」(松下集・橘・1029)。

【他出文献】竹林抄1688・芝草内連歌合(天)2580・芝草内連歌合(松)45(第三句「かせもかな」)・芝草句内発句(吾妻下向発句草)558・大発句帳2700

【補説】「吾妻下向発句草」の配列から文明二年夏の句。

この句に関して『竹林抄之注』は、「是は、蓬生の宿の橘に、はらひし程の雪もかなと」其折節を思て云へる義也」、『竹聞』は、「源氏よもきふノヤト、其時ノ雪ヲ夏ミたきト也、あつき時分也」と注する。

『芝草内連歌合』(天)は橘の昔なつかしい香りを詠む「たちはなに忘るゝこすの匂ひかな」との勝負で、勝。『芝草内連歌合』(松)も同じ。

【現代語訳】

あの源氏物語で、末摘花邸の庭の橘の上の雪を光源氏が払わせたが、その時の庭の深い雪のように、多くの橘の花びらの雪が散り敷いていてほしいことだ。

蓬生の宿の橘の木に関しては、つもった雪を、随身に払わせたことですよ。その雪の深さを思うと、このごろ咲いた橘の白い花びらが雪のように見えるのが、うっすらとしか散り敷いていないことを、残念だと言うのである。

【引用文献典拠一覧】

和歌の引用は原則として『新編国歌大観』により、『草根集』は『新編私家集大成』本によった。また、『万葉集』の歌番号は西本願寺本(旧国歌大観番号)により、引用は『新編日本古典文学全集』によっている。連歌関係その他、引用は左記に記すが、『連歌大観』

第一巻、第二巻(古典ライブラリー・平成二八、二九)を適宜参照している。

自然斎発句…岩波文庫『宗祇発句集』(岩波書店・昭和二八)
大発句帳…古典俳文学大系CD・ROM所収鈴木本
芝草句内発句…貴重古典籍叢刊5『心敬作品集』(角川書店・昭和四七)
連珠合壁集…中世の文学『連歌論集一』(三弥井書店・昭和六〇)
竹林抄…新日本古典文学大系『竹林抄』(岩波書店・平成三)
光源氏一部連歌寄合…『良基連歌論集三』(古典文庫・昭和三〇)
竹林抄之注…貴重古典籍叢刊2『竹林抄古注』(角川書店・昭和四四)
竹聞…貴重古典籍叢刊2『竹林抄古注』(角川書店・昭和四四)
吾妻邊云捨…貴重古典籍叢刊5『心敬作品集』(角川書店・昭和四七)
万葉詞…陽明叢書国書編14『中世国語資料』(思文閣出版・昭和五一)
万葉集抄…『萬葉学叢刊中世編』(古今書院・昭和四七)
宗砌等日発句…『連歌大観一』所収大東急記念文庫本
源氏一滴集…『未刊国文古註釈大系第11冊』(帝国教育会出版部・昭和一一)
園塵第四…『早稲田大学蔵資料影印叢書第三十六巻』(早稲田大学出版部・平成五)
源概抄…『源概抄 源氏小鏡 寛永古活字本』(勉誠出版・平成二二)、『源氏物語古注釈叢刊第十巻 源氏一部抜書 源概抄 源氏こかゝみ 源氏小鏡 光源氏一部謌并詞』(武蔵野書院・平成二二)
長禄三年千句…『大山祇神社法楽連歌』(大山祇神社社務所・昭和六一)
秋津洲千句…日文研連歌データベース所収本
染田天神法楽千句…日文研連歌データベース所収本
萱草…貴重古典籍叢刊12『宗祇句集』(角川書店・昭和五二)及び『連歌大観一』所収早大伊地知文庫本
宇良葉…櫻井本(国文学研究資料館マイクロフィルムサ1-1-6)、貴重古典籍叢刊12『宗祇句集』(角川書店・昭和五二)
拾玉集…和歌文学大系『拾玉集(下)』(明治書院・平成二三)
菟玖波集…『連歌大観一』、金子金治郎『菟玖波集の研究』(風間書房・昭和四〇)
壁草(大阪天満宮文庫本)…『壁草〈大阪天満宮文庫本〉』(古典文庫・昭和五四)及び『連歌大観二』
連歌愚句…貴重古典籍叢刊11『七賢時代連歌句集』(角川書店・昭和五〇)
看聞日記紙背連歌…図書寮叢刊『看聞日記紙背文書・別記』(養徳社・昭和四〇)
下草(龍谷大学本)…日文研連歌データベース所収龍谷大学本
匠材集…岡山大学国文学資料叢書『匠材集』(岡山大学池田家文庫等刊行会・昭和五九)
河越千句…古典文庫『千句連歌集五』(昭和五九)
熊野千句…古典文庫『千句連歌集五』(昭和五九)
宝徳四年千句…古典文庫『千句連歌集三』(昭和五六)
産衣…『連歌法式綱要』(岩波書店・昭和一一)
ささめごと(草案本系統)…『歌論歌学集成第十一巻』(三弥井書店・平成一三)
光源氏一部謌…今井源衛編『源氏物語古注集成3 祐倫 光源氏一部謌』(昭和五四・桜

楓社）
類字源語抄…続群書類従18輯下、広本系は『源氏物語古注集成21　仙源抄　類字源語抄
続源語類字抄』（おうふう・平成一〇）
私用抄…『連歌論集三』（三弥井書店・昭和六〇）
梅春抄…『連歌論集四』（三弥井書店・平成四）
雨夜の記…『連歌論集四』（三弥井書店・平成四）
徒然草…新日本古典文学大系『方丈記　徒然草』（岩波書店・一九八九）
雲玉和歌集…古典文庫二四八（昭和四三）
塵荊抄…古典文庫四四八（昭和五九）
紫明抄…玉上琢彌編『紫明抄　河海抄』（昭和四三・角川書店）
蓬左文庫本源氏抜書…伊井春樹「『源氏物語一部之抜書并伊勢物語』解題及び翻刻」（『古代文学論叢』第十一輯（平成元・武蔵野書院））

【参考文献】

岡見正雄「心敬覚書―青と景曲と見ぬ俤―」（『室町文学の世界―面白の花の都や―』（岩波書店・平成八）
『源氏物語大成』（中央公論社・昭和二八～昭和三一）
寺本直彦『源氏物語受容史論考　正編』（風間書房・昭和四五）
湯浅清『心敬の研究』（風間書房・昭和五二）
稲賀敬二「宗砌とその前後―句評に「巣守の三位」が登場する背景―」（『連歌研究の展開』（昭和六〇・勉誠社）
安井重雄「木戸正吉『和歌会席作法』翻刻と校異」（「龍谷大学論集」NO.457・平成一三・一）
島津忠夫『心敬と宗祇』（和泉書院・二〇〇四）
金子金治郎『心敬の生活と作品』（桜楓社・昭和五七）

この訳注は、科研費基盤研究C「中世歌学の享受から見た心敬の文学作品の創造と新撰菟玖波文学圏への影響に関する研究」の成果である。